

Title	雑報
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1921), 1(11): 222-224
Issue Date	1921-09-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/159617">http://hdl.handle.net/2433/159617</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 雜報

## ●金星の自轉 金星の自轉週期について

ては昔しから諸説紛々である。最初カシニが望遠鏡で金星面を見た時斑點が見えたので、之れの運動を測つた結果、彼れは自轉週期二十三時余と發表し、之れが長く學界に信ぜられてゐた。しかるに一八七八年に至り、伊太利のスキアパレリが新しい八吋望遠鏡で觀測の結果、金星の自轉は公轉と同じく其の週期二百二十四日余であるから、金星は常に同一方面を太陽に向けてゐると言ひ出したので、學界は大に迷はされた。今でも世の天文學書にはカシニ説を採用してゐるのと、スキアパレリ説を用ゐてゐるのと二種ある。二十世紀に入つて、露西亞のペロホルスキ氏は分光器で金星表面の視線速度を測定した結果、此の星の自轉は十六七時間程のものだといふ説を出した。

最近には米國の井リウム、ピケリング氏は今年初め金星の表面に著しい光點を認め、之れを觀測した結果、金星の自轉軸は殆んど全く黃道平面に一致して居て、自轉週期は六十八時間だと發表した。

## ●彗星だより 去る三月十三日南アフリ

カ喜望峰のライド(W. Reid)氏は本年になつて始めての彗星發見をやつた。發見當時は光度九等ぐらゐで、山羊座にあつたが、其の後漸次北上して、四月六日には赤道を通過し、五月中頃、遂に北極を去る四度のところまで達し光りも又増してチラと肉眼に見えるに至つた京都大學でも五月には山本、川崎、中村三氏が之れを觀測したが、六月からはだんだん遠さかつてしまつた。此の星は假に 1921aw 呼ばれる。

次に四月十一日、御待ち兼のウイネケ彗星が米國エルケス天文臺のバアナアド(E. E. Ba

nard)氏によつて北冠座に發見された。之れは發見當時頗る弱い光であつたが、漸次接近して來たので、五月の末には英國のデニング(Denning)氏は双眼鏡で見たといふ。之れも其の後東へ南へと行つて、六月末からは地球上南半球でなければ見なくなつた之れが 1921b である。

三番目は四月二十四日に露國カザン天文臺のドウビアゴ(D. I. Igo)氏が發見した。之れは露國では直ちに觀測をやり、軌道の計算もされたが、外國に知れたのは五月中旬であつた。之も六月には南半球に行つてしまつた。今右の三つの軌道要素を掲げる

	ライド彗星	ウイネケ彗星	ドウビアゴ彗星
近日點通過	一九二一年五月十日	一九二一年六月十二日	一九二一年五月七日
近日點進度	六十四度五分	一九二度三六分	二〇一度一三分
昇交點の黃經	三六三	六二二・六六	六二・〇五
軌道傾斜	一一・五	一・一	二二・三三
近日點の距離	一・〇三天文單位	一・〇四天文單位	一・〇二天文單位
離心率	一・〇〇〇	〇・八二五	一・〇〇〇
週期		六・三年	
計算者	アイナアソン氏	メルトン氏	エベル氏

右の中で第一と第三とは新彗星らしい。第二のものは百年以前から御馴染の星であるが最近、木星の攝動を受けて、少しく軌道が大きくなった。

尙今一つ、エンケ彗星は七月二十七日に南亞喜望峯でライド、スキエレルプ両氏が発見したといふ。

●外國に於けるウイネケ流星群の觀測 最近に手に入つた報知によれば、去る六月二十五日頃から米國のベアナド氏や印度のチャンドラ氏等は此の流星群を見守つた。何れも數個の星を見たばかり。ベアナド氏はデニング氏の一九一六年に見たのが唯一の例だつたのだらうと言つてゐる。しかし、一方に於て、デニング氏はやはり六月二十八日の夜に此の群の流星を若干個觀測し、殊に一等星以上のものを四つも報告してゐる。

●八月の流星 毎年八月は流星の多い月であるが、今年も其の例に漏れなかつた。東京の神田氏は八月十一日わざ／＼長野縣の北部に旅行して、同好會員中澤、宮川諸氏等と數百個の流星をベルセウス座から飛ぶのを觀測せられた。京都では中村氏等がやはり此好機を逸せず毎夜大勉強で觀測せられた。其の收穫は多大であるらしい。目下其の結果を整理中又、山本助教は荒木學生と共に、丁度八月十一二日頃の夜は淺間山の山腹に重力偏差觀測中であつたが、山上の空が非常によく澄んだ空で、多くの大小流星を觀られた。特に十一日の午后十時頃には金星の光に數倍するやうな大流星が飛んだので、長野縣では其の輝いた尾を見た人は彗星だと言つて大騒ぎであつたらしい。此の流星は別項記載の如く、京都で山本夫人も觀測された。

●相對原律の難點 アインシュタイン教授の相對原律が近頃の天文物理學界に於ける大評判であるが、純天文學上から此の説の正否を檢するための三種の現象がアインシュタイン氏自身によつて示されてゐる。即ち

- (一) 日蝕皆既の時太陽に近い星の移動
- (二) 水星軌道の近日点の異常進行
- (三) 太陽から來る光波の變移

右の中(一)については一昨々年英國から派遣された觀測隊が南太平洋の日蝕で略此の事實を認めた。又(二)は十九世紀の中頃ルベリエの發見以來の難問題が之れによつて解決された。獨佛あたりから實驗的証明を發表した學者がある。それで、之れでアインシュタイン説は天文學上から完全に承認を得たかといふと、決してそうではない。近頃、米國のプリア氏(C. L. Poor)はサイエンス誌上に於いて、(一)の問題を論じてゐる。プリア氏に據れば、若しアインシュタイン説で水星の近日点の異常進行が認められるとすると、同様に金星や地球や火星にも近日点の異常進行がある筈なのに、事實此の事が無いといふのである。氏は水星に限つて此の異常進行が存在するのを、ゼーリゲル流に考へて、太陽系の中心部に擴がつてゐる。一種の抵抗物質によつて説明するの

が好いと云つてゐる。其の他(二)や(三)にて種々の異論がある。がアインシュタイン説に關する精しいことは近日、項を改め紹介する。

●ナハリヒタン雜誌創刊百年 獨逸キールから發行してゐるアストロノミシエナハリヒタン(略して「ア・ズ」)雜誌は今を去る

一百年、西曆一八二一年、九月に其の第一號を發刊した。創刊者はアルトナ天文臺のシウマル(H. C. Schumacher)で、デムアルクの大藏大臣モエスチンク(Moesing)と相談の結果、天學上の小論文、觀測結果及び推算豫報等を各地の同勞者間に迅速に頒たんとする目的を持つて發行されたもので、始めの間は特にベッセル、ガウス、オルベルス等の援助によつてゐた。平常は大判八頁を以つて一號分とし、材料のあり次第發行することとし、二十四號を以て一卷に纏められてゐる内容は始めから寄稿者の意を尊んで獨、佛、英、羅典の四種の言語なれば原文のまゝ載せる規定であつたが今日までの經過から見ると、尙右の外に伊太利、葡萄牙、西班牙の三國語も載せた。又必要に應じ挿圖として、木版、銅版等をさまざま用ゐてゐる。今日までの編輯主任者は、

- シウマヘル(一八二一—一八五〇)  
A. C. ベテルゼン(一八五一—一八五四)  
P. A. ハンセン(一八五四—二月十)  
C. A. F. ベテルス(一八五四—一八八〇)  
C. F. W. ベテルス(一八八〇—一八八二)  
A. グリユゲル(一八八二—一八九六)

Hクロイツ(一八九六一一九〇七)  
Hコホルト(一九〇七)

右の中、クリュゲル時代からはプロイセン國文部大臣の保護と天文協會(Astronomische Gesellschaft)の援助が加つて今日に及んでゐる。大論文があれば、それはシュマルヘル時代既に補欠號(Ergänzungshefte)を出したことがあるけれど、其の後中絶したのを、後ハクロイツ時代に至つて之れを復活した。コホルト時代になつて一九一三年文獻附錄(Literarische Beilagen)を別に發行し、近頃一九一九年夏以來、又、觀測報(Beobachtungs-Zirkular)なるものをも發刊するに至つた。現在は第二百十四卷目を出してゐる。之れは今日、天文學上の専門雜誌として第一流のもので、専門家は一刻も此の雜誌から眼を離すことが出来ない。

## △△△ 火星無線電信傍把

(紐育合同通信一日發) マルコニー氏は快走船エレクトラ號に於て火星よりの無線電信を傍把せりマルコニー氏が火星より傍把せる無線電波の延長は既に世界にある最高威力の無線電信所のそれよりも大なりと。此の電報が各新聞に掲載されたのは去る九月六日であつた。しかし之れは大なる誤りである。火星は其の當時、地球から言へば太陽と

合の位置を過ぎたばかりで、吾々からの距離は七千萬里の遠方にある、若し火星に人類が居るならば、此の地球人類の騒ぎを笑つて。

『始めて天體相互通信に、御互ひがわざわざ遠く離れてゐる時機を撰ぶ馬鹿があるものか。來年の春まで待てば、一千七百里に近づく時があるぢやないか』

と言ふのでありませう。左に日下部博士の談があります。

### 東北大學の日下部博士談

新聞紙上で又も紐育發でマルコニー氏が火星からの電波を受けたとの通信が見えますが昨年一月頃と記憶して居ます既に昨年春火星から電波を受けたとしたならば

學術界では今日迄等閑にして居る譯がないのに又も宣傳したと云ふのは所謂例の米の宣傳主義でたしかにマルコニー會社の廣告的宣傳と云ふも過言ではありませう。世界は無線電信より一層強い電波を感じたらどんな悪い機械でも感じなければならぬそれを尤も弱い電波を感じたと云ふならマルコニー氏の發明の機械の良い事がわかるが強い電波であつたと云ふから

原の町の無線電信所にも感じなければならぬ殊に歐洲諸國の各地の無線電信所では感じたと云ふ事を報導して居ない唯マルコニー氏の快走船で感じたこと云ふ事は實にあやしい

です如何にして火星と云ふ事が確信され様か第一太陽からは種々の現象で極光や磁氣あらしたを現出するので常に發電し地球上に色々影響して居る事は今喋々する迄もないがその太陽からの電波につき研究もせず否定もせず火星からのこの推定はマルコニー氏の發言とも思はれない電波も光線と同じ事で發電體に近ければ強く遠ざかれば弱くなるのは距離の自乗に逆比例するでマルコニー氏の快走船附近空中からの發電にても機械に作用したものに非ざるか若し火星からの通信なら一回に限らず日に何回も限りなく電波を送り各所の機械に同時刻に感じなければならぬ電波の地球を通過するには一秒時間の何十分の一と云ふ時間で先づ時間がないと云つてよい我々が夜

宮城野原に行き鈴虫の聲を聞いてもそれは前後左右何れよりの聲であつたかは一聲や二聲ではとても方向などわかり様もないそれに無線電信機械と云ふのはその耳以下であるから方向などわかる様がなく夫で火星など早我點するの愚も甚だしい事と思ひます要するに去る一日に感じたものが今日未だ學界に噂になつてない事を見ると昨年春のと同様に世界に向つてマルコニー會社の存在と機械の發賣方につきての一種の考案した世界の廣告の宣傳です若もたしかに感じたものであつたら我々の

大に研究すべき事柄だが今日の場合一種の新聞的電文であらうと思ひます云々

(新東北、九月八日)